

下のやつ

鶏肉

0時になった。

おい、これをやっておいてくれ」

上のやつが、少し申し訳なさそうにしながらも、俺にすべての仕事を押し付けた。数えるのも億劫になる量だ。もちろん、俺だってそんなものを受け取りたくはない。しかし、やつよりも立場が下である俺は、それを断ることなどできない。俺はしぶしぶそれを受け取った。

その仕事の山を見て俺は途方に暮れた。一日で終わらせるには骨の折れる量だ。もうすでになくなっていている俺の一つ上のやつよりも、さらにずっと上のやつが立てたプランによれば、各人の仕事量はそんなに多くなかったはずだ。だが、いい加減な上のやつが自分より下のやつに仕事を押し付け、せいともその流れに便乗して自分の仕事をさらに下のやつに押し付ける。それがなんでも繰り返されるうちに、下のやつに押し付けられる仕事量はどんどん溜まり、今の俺の目の前にあるほどの量にまで増大したのだ。

まったく、上のやつらは勝手だぜ。自分は計画を立てるだけ立てておいて、実行は下のやつらに任せやがって。

だが、俺は違う。俺はこの負の連鎖を断ち切ってやる。誰かがいつかすべての仕事を片付けなくてはならない時が来るというのなら、俺がその役目を引き受けてやろう。俺がここですべての仕事を片付け、俺より下のやつには自分の仕事だけをやらせてやろう。

そう決意すると、俄然やる気が湧いてきた。この仕事の山も、難なく片付けられそうな気がする。俺は時計を見た。もう一時だ。いくらやる気に満ち溢れているとはいえ、無理をしてはいけない。まだ時間はある。とりあえず睡眠を取り、頭をすっきりさせてから仕事に取り掛かろう。そういうワケで、俺はひとまず眠りについた。

目覚めたのは午前八時だった。外はすっかり明るくなっている。今日は日曜日。仕事を片付けること以外に予定はない。残りの時間、すべて仕事に費やせば、悠々と終えることができるだろう。

そこで腹がぐうと鳴った。そういえば腹が空いている。

エネルギーがなくては仕事など片付けられるはずもない。しかし、あいにく食料品の類を持ち合わせていなかった。外に出て、なにかを食べよう。三十分くらいならば、そんなに仕事に影響しないだろうし。

俺はそう思って外に出た。

帰ってきたのは午前十時だった。朝食を食べる時間はそんなにかからなかったのだが、近くにショッピングモールがあり、そこで仕事の処理に役立ちそうな道具をいろいろ買っているうちに、時間が過ぎてしまったのだ。

だが、もう万全を期したはずだ。俺はこれからただ仕事にだけ目を向けよう。

と、思ったら、よく見ると部屋や机の状態がよろしくないことに気付いた。散らかりすぎている。これでは、どこになにかあるのかわからない。仕事の効率が落ちてしまう。仕方ない。掃除をするか。俺はこうして二時間を費やした。

昼になり、せっかくショッピングモールに行ったのに食料品を買わなかった事を後悔した。エネルギーを補給するためには、また外に出なくてはならない。しかし、やはり

エネルギーがなくては仕事などできないのだ。俺は昼飯を食いに出かけた。日曜日ということもあって、どこに行っても混んでおり、おまけに同じ轍は踏むまいと夕飯の買い物にも出かけていたので結局帰ったのは十五時だった。

帰ると、飯を食った直後ということもあり、眠くなってきた。昼寝は作業効率を高めると聞いたことがある。ならば寝よう。これで仕事の処理がはかどるのなら、やらない手はない。

起きたのは四時間後の十九時だった。

少々寝すぎたが、おかげで頭もすっきりしている。よし、

これからだ、と意気込んだ。

俺は夕飯を食べ、シャワーを浴びてサッパリしてから仕事に取り掛かった。

時刻は二十時。俺はまず、自分が本来やるべきはずの仕事から取り掛かった。一生懸命やった。だが、一時間で半分しか終わらなかった。

俺はここでようやく現実を見た。終わるはずがない。自分の仕事だけならば、単純計算であと一時間やれば終わる。だが、俺が片付けようとしている仕事の量は、こんなもん

じゃない！ 終わるものか！

ということ、俺は自分の下のやつに仕事を押し付けることになる。俺はすべての仕事を片付けるのではなかったのか。あれほど嫌っていた上のやつと、同じことをするのか。それでいいのか。

そういった怒りや、後悔も、時計を見るとすぐに吹き飛んだ。もう二十三時。なにをやってももう遅い。

俺は今日締め切りの仕事があるかどうか探した。どうも今日中にやらなければならぬ仕事はないようだった。ならば、もういい。どうせ俺より下のやつは数え切れないほどいるんだ。俺がこの仕事を片付けなくても、誰かがきつとやってくれるさ。

0時になった。俺は昨日渡された量より、ちょっとばかり多くなった仕事を抱えて下のやつのところまで行った。

下のやつは俺を軽蔑した。わかる。わかるぞ。俺も、最初はそうだったんだ。だがな、お前にはこの俺の感じていた怒りと後悔がわかるまいよ。いや、本当はわかるはずなんだ。だがな、なぜだろう。俺がお前に変わる時、それがきれいさっぱりなくなっちゃうんだ。俺も、上のやつ

申し訳なきような顔は見たはずなんだ。それが俺の中に残ったまんまだったなら、俺は仕事を片付けられたはずなんだがな。

「……あー、これが、本来一昨日終わらせる予定だった、来週に出さないといけないレポートで、こっちは昨日終わらせるはずだった、明後日ドイツ語の講義での提出の課題で……」

全部説明しきらないうちに、下のやつは仕事の山を俺から奪ってさっさと行ってしまった。

どうやら俺の下のやつは、俺よりも使命感に燃えているらしい。

俺には、やつが最初に投げかけた視線が忘れられない。毎日、定めた目標を消化していけば、こんな量にはならないのに」

俺の下にいる者。俺と持っている権力は同じである者。それでいて、俺の後を引き継がざるを得ない者。俺でいて、俺でない者。

明日の俺は、そういう視線を、俺に投げかけたのだった。